

氏名（本籍）	吉田 睦
学位の種類	博士（言語学）
学位記番号	博 甲 第 7171 号
学位授与年月日	平成 26 年 12 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	日本語母語話者・学習者の会話構築に関わる質問表現の研究

主査	筑波大学 教授	博士（言語学）	砂川 有里子
副査	筑波大学 教授	博士（言語学）	杉本 武
副査	筑波大学 准教授	博士（言語学）	石田 プリシラ・アン
副査	筑波大学 教授	Ph.D.（言語学）	今井 新悟

論文の要旨

本論文は、日本語母語話者と日本語学習者が会話を行う場面（以下「接触場面」と呼ぶ）で用いられる「質問表現」の語用論的側面について考察し、会話参加者の属性や場面の異なりによって特徴的に現れる質問表現の記述と、質問表現が出現する会話の構造を記述することを目的とする。

質問表現の最も基本的な機能は情報要求である。情報要求を行うことは、情報交換の契機となるだけでなく、自分からコミュニケーションを生み出し、人間関係を構築する能動的な行動となる。また、質問表現は、単に情報を問うだけでなく、質問者と応答者の関係性を示す発話として機能し、会話の構造を形作ることに貢献している。本論文はこのような質問表現が、談話の進行過程において果たす役割を考察するため、国内接触場面、海外接触場面、教室談話、遠隔談話という4つの異なる環境において収集された会話データを分析し、質問表現がそれぞれの場面でどのような会話の展開を行い、どのような談話構造を形作るのに貢献しているかを考察し、各場面に即した質問表現の語用論的な特徴の記述を試みる。

本論文の構成と各章の概要は以下の通りである。

序章

【第一部】自然談話

第一章 理論的背景と本研究の位置づけ

第二章 日本語学習者と母語話者の談話進行における質問表現

第三章 会話構築に関わる質問表現と応答：質問者・応答者からの相互的な構築

第四章 海外日本語談話環境にみられる質問表現

【第二部】教室談話

第五章 教室談話における質問と発問

【第三部】遠隔談話

第六章 異なる談話環境間にみられる質問表現

終章

本論文は、「自然談話場面」「教室談話」「遠隔談話」の三部構成から成り、第一章では質問表現に関する先行研究と本論文の立場が論じられる。

第二章では、国内の談話調査をもとに、初対面での接触場面会話にみられる質問表現の様相を考察し、相手に関する情報を持たない初対面場面での質問表現の特徴を記述する。また、(1) 中級学習者と母語話者、(2) 上級学習者と母語話者、(3) 母語話者同士という3種の会話を比較し、質問表現の談話展開機能として、「同意・同調を求める機能」、「意味交渉を求める機能」、「事実の情報を求める機能」、「意見や感想を求める機能」という4つの機能を設定することにより、日本語能力の違いによる質問表現の使用や、談話が進行する過程で質問表現が果たす談話管理上の機能について考察する。

第三章では、親しい母語話者同士の会話を分析する。事前に共有情報のある者同士のやり取りの場合、共有情報を前提として逸脱とみられる質問表現が表出されることが予想されるが、分析対象データからも質問の多重性による発話連鎖の飛躍や応答の回避の現象といった逸脱的な現象が観察される。本章ではこれらの現象について考察し、「質問を重ねることによって次話者を階層づける」、「現話者を次話者に再度指定する」、「選ばれていない参加者が次話者として自己選択する」といった積極的で協働的な連鎖が行われていることを論じる。

第四章では、海外接触場面を対象とし、国内接触場面と同じ条件で行った調査データを用いて両者の比較を行う。考察の結果、海外接触場面では、国内に比べて「学習者からの質問表現」、「学習者側の話題領域選択」、「質問形式での話題導入」が多く使用されるという現象が観察された。海外の場合、国内とは反対に日本語学習者のほうが文化ホストであることから、日本語母語話者よりも日本語学習者に帰属する情報のほうが多い。上記の現象はこのことが原因となって生じたものであるとし、海外接触場面では、情報の帰属と話者の参与役割が交錯した複雑なコミュニケーションが行われることを実証的に論じている。

第五章では、教室談話における質問表現を取り上げ、自然談話における質問表現との比較を通じて、会話者の参与関係が「教師—学生」に固定された教室談話における質問表現の特徴を記述する。その結果、教室談話では「回答内容が限定された既知の質問」が多いのに対して、自然談話では「回答内容が限定された未知の質問」が多いことが明らかにされる。さらに、質問表現を通して教師と学習者が談話を展開するプロセスを解析し、教師と学習者、あるいは学習者同士で協働的に問題解決を達成するために質問表現が用いられていることを論じる。

第六章では、ビデオカンファレンスシステムを用いた遠隔接触場面における質問表現を分析し、コミュニケーションの阻害要因として、視覚要因、環境要因、音声要因があること、またそれぞれの要因に基づく特徴的な言語表現が観察されたことを論じている。さらに、遠隔接触場面に特徴的な質問表現の使用について考察し、質問表現がこれらの阻害要因を克服し対面性を構築するためのストラテジーとして機能すること、および、会話参加者は質問表現の使用によってコミュニケーション上の問題に対処しながら情報交換を達成していることが実証的に示される。

終章では、各章の結論を述べ、本論文の日本語教育への応用と今後の課題が提示される。

審査の要旨

1 批評

従来、海外で日本語を学ぶ者は、教室環境での日本語使用に限定され、教室以外の場面で日本語母語話者と接触する機会が極めて限られていた。しかし、近年、インターネットやビデオカンファレンスシステムの普及によって、海外にいながらにして日本語母語話者と接触し、自然環境の中で日本語を習得する機会が増えてきている。しかし、それぞれの場面でどのような日本語が使用され、学習者がどのようなストラテジーを使用しているのかについては詳しいことが明らかになっていない。本論文は、日本人と触れ合う機会の少ないフランスの大学で日本語を学ぶ学習者を対象とし、彼らの日本語授業での教師との会話、日本語母語話者との自然会話、および、ビデオカンファレンスシステムによる日本語母語話者との会話を取り上げている。さらに、日本語母語話者同士の会話や、日本語母語話者と日本で日本語を学ぶ学習者との自然会話についてもとりあげ、国内接触場面、海外接触場面、教室談話、遠隔談話の4つの場面について、それぞれの場面における談話の特徴を記述する研究である。このように多様な場面における学習者の言語行動を記述した点が独創的で意欲的であり、高く評価できる。

また、本論文が分析の対象とする質問表現は、単に情報要求を行うだけでなく、質問を切り出すことによって話題を提示したり、発話権を譲渡したり、会話参加者の役割を示したりするなど、さまざまな働きによって談話の展開に貢献する。このような質問表現に注目し、多様な場面での談話展開のなかで、質問表現がそれぞれの場面に特徴的な役割を果たすことを記述し、日本語教育への応用に資する有用な知見を多く提供している点も本論文の優れた点である。例えば、ビデオカンファレンスという新しいメディアを用いての会話の分析において、意思疎通を疎外する視覚要因、環境要因、音声要因の3つの要因に注目し、これらの阻害要因の解消と対面性の構築のために質問表現が果たしている役割を明らかにした点や、海外環境において「学習者からの質問表現」「学習者側の話題領域選択」「質問形式での話題導入」が多く用いられることの原因を追及した点など、新しいメディアを活用した日本語教育や海外での日本語教育の方法に多くの示唆を与える優れた研究となっている。

一方、母語話者同士による会話の分析を日本語学習者の会話と比較し、分析するという点において、三章での議論は全体の議論の中で十分に活かされているとは言い難い。しかし、母語話者同士の逸脱と見える行動が協働的な連鎖を作り上げていることを明らかにした点については高く評価できる。ここでの議論を接触場面の分析に活かすことは、今後の研究につながる課題として重要なものであり、今後の研究の発展につながる可能性を有している。本論文は、日本語教育への応用に資する優れた研究であり、今後のさらなる発展が期待できる。

2 最終試験

平成26年10月22日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。